



尾道商業会議所記念館

第48回企画展示
尾道楽天地界限～花街と芸能娯楽のパラダイス～
2025(令和7)年5月30日(金)～10月22日(水)



尾道楽天地界限今昔マップ

かつて尾道には、「楽天地」とも呼ばれた歓楽街が、久保新開・新地エリアに広がっていました。楽天地とは、娯楽の場を意味する言葉で、たとえば大阪市中央区千日前(旧南区難波新地)にあった複合型娯楽施設「楽天地」が有名です。

江戸時代、北前船の寄港地として栄えた尾道は、商業の発展とともに歓楽街もまた発展していきました。新開・新地は、芸妓や娼妓が行き交い、色香を漂わせていたかつての花街であり、芝居や映画、音楽などの芸能娯楽が集まる、尾道を代表する一大レジャー&ナイトスポットでもありました。

やがて、法の施行や時代の流れなどにより花街は姿を消し、飲食店街へと変化していきます。1979(昭和54)年6月1日に発生した戦後の尾道で最大といわれる久保大火では、喫茶店、クラブ、バーなど多くの店舗や民家が焼失し、大きな被害を受けました。

それでもなお大火を乗り越え、地域住民や飲食店、行政が一体となって取り組んできた新開地区の活性化事業は、長い年月を経て、いま実を結びつつあります。新しい店舗のオープンやイベントの開催を通じて、新開にはつねに新しい風が吹き込まれています。

「新地芸妓に新開娼妓」とうたわれた尾道の新開・新地は、中国地方でも古くから知られた歓楽街でした。現在の住所では久保二丁目付近にあたり、名の通り新しく造成された土地です。古地図からその成立と変遷をたどることができます。

大正から昭和初期の市街図には、「新開」は仲之町通りを挟んだ北側、「新地」は相生通り南側の海沿いを指していました。江戸時代には現在の川端通りに防地川が流れ、厳島神社(後に八坂神社を合祀)も海辺に位置していました。現在のおのみち歴史博物館の北には、船だまりもあったとされています。

造成の始まりは1690(元禄3)年、久保町の松本千之助が申請し、1698(元禄11)年に工事が開始されました。1750年代には米場新地や沙寄場新地(久保新開)などが整備され、地域はさらに広がります。

1779(安永8)年には、土堂町の遊廓が華美すぎるとの理由で廃止命令を受け、久保新開へと移転。これにより、新開・新地は遊廓街としての性格をより強くしていきます。

1853(嘉永6)年の遊廓格付け番付「諸国遊所見立角力並に値段附」や「国々湊くらべ」には、尾道が安芸の御手洗、備後の鞆と並び記載されており、地域内外にその名を轟かせていたことがわかります。藩の出張記録『尾道表出張中日記帳』には、竹亭・鶴亭・胡半といった遊廓や芸娼妓の名も記されており、尾道の花街が瀬戸内随一の賑わいを見せていたことを物語っています。



江戸時代の新開界限
(尾道町絵図 1821(文政4)年 尾道市立中央図書館蔵)

花街今昔 ～尾道に見る『花街』の世界～

商店街が閉まり始めると、新開・新地の各館では掃除に打ち水を終えて、玄関脇には盛り塩が置かれます。身支度を終えた芸娼妓たちは、下駄の音をはずませながら明神さん(厳島神社)や周辺の稲荷さんにお参りました。

同じ花街といっても、新開と新地では家屋の構えや雰囲気少し違いがありました。これは、新開には娼妓、新地には芸妓と主役が異なっていたことに関係しているのかもしれませんが。娼妓とは、歌や舞をまったり、公的に売春を許されていた女性たちのことで、芸妓とは歌舞や音曲、鳴物で客をもてなす女性たちのことです。どちらも置屋と呼ばれる家に所属し、客の求めに応じて出向いていました。

江戸時代、尾道は北前船の西廻り航路上にある重要な港町として栄え、商業の発展とともに花街も賑わっていきました。しかし、明治時代以降の花街は、時代の流れとともに栄えたり、衰えたりを繰り返していきます。

1872(明治5)年、明治新政府によって芸娼妓解放令(人身売買の禁止)が公布されると、尾道でも在留2名を除き、ほとんどの芸娼妓が一斉に帰郷、新開・新地は一時衰退します。

その後、1877(明治10)年、広島県は営業場所を限定したうえで、「貸座敷娼妓渡世規則」第一条により、尾道を含む4カ所での貸座敷(揚屋)の営業を許可しました。

大正時代にはいると、1915(大正4)年発行の『尾道案内』には「遊廓」の項が設けられ、新開・新地の復活が窺えます。同書によると、当時の尾道には置屋36軒、お茶屋19軒、芸娼妓98名が在籍していました。1926(大正15)年には尾道警察署による調査が行われ、楼主たちの自主的な待遇改善も進められていきます。

昭和初期、1930(昭和5)年の『全国遊廓案内』によると、尾道には貸座敷は78軒、娼妓は220名と大正時代よりは増えたものの、経済の低迷と共に、客足は乏しくなりました。この年の地元紙『芸備日日新聞』の記事には、「この頃は遊客は皆無といふ有り様で(中略)近頃の新地新開付近は毎夜閑古鳥が鳴いている」と伝えられ、衰退の様子が窺えます。ところが、戦時下に入ると、軍需工場並みに海運界が活気づくに従い、新開・新地も近年稀にみる好景気にみまわれました。

1945(昭和20)年の終戦後、アメリカの占領軍が広島・呉地区に進駐し、各地に慰安所が開設されました。尾道からは、安芸郡海田市町の慰安所へ娼妓が派遣されたことが記録に残っています。翌年、GHQ(連合軍総司令部)は公娼制度の廃止を命じ、制度は事実上の終焉を迎えました。

1948(昭和23)年、性病対策の観点から、当時22軒あった遊廓は相次いで閉業し、建物はホテルや喫茶店に転用され、87名いた芸娼妓の多くは帰郷、あるいは喫茶店の給仕や他の職業につくようになりました。こうして、江戸時代中期から続いた尾道の伝統的な花街は、ひとまずその歴史に幕を下ろしました。

しかし、その後もしばらくの間、特殊飲食店(特飲店、俗に赤線と呼ばれる)としての形は残りました。1951(昭和26)年には、特飲店がおよそ30軒、芸娼妓120名と再び増加の兆しを見せ、1953(昭和28)年には、新開を正式な赤線区域とする要望が出されました。

1957(昭和32)年に売春禁止法が公布され、翌年4月に施行が決定すると、尾道ではその直前の2月、解散式が行われました。花街の最後の日々は、多くの閉業を惜しむ客でにぎわい、最後まで働いた女性たちは、帰郷、就職、結婚など、それぞれの道を歩み始めていきました。

売春禁止法施行後、尾道商工会議所や尾道市社会福祉事務所が、転業した店舗と協力して、新しい新開・新地の街づくりを模索しました。尾道商工会議所では「楽天地街観光対策懇談会」が開かれ、観光都市としての新たな未来に期待を託しました。

新開・新地は、「楽天地」とも呼ばれたその名のとおり、花街や飲食街としてだけでなく、娯楽や芸能の盛んな地域でもありました。「楽天地」という名前前で広く知られているのは、大阪市中央区千日前(旧南区難波新地)で、映画館や劇場など、さまざまな施設が集まった複合型の娯楽地として多くの人に親しまれていました。

江戸時代、1821(文政4)年の「尾道町絵図」によると、新地にあたる現在の尾道市教育会館付近に「芝居小屋」と記されています。これが後の「偕楽座」と呼ばれる劇場の前身と見られます。「偕楽座」について記されている最も古い資料の一つが、1915(大正4)年発行の『尾道案内』で、定員2000人の大劇場であったとされています。

「偕楽座」は3度の火災にみまわれ、1924(大正13)年の再建築時には、木造3階建てで^{ますせき}樹席を備え、廻り舞台と長い花道を持つ、本格的な上方歌舞伎の常設の芝居小屋として知られていました。しかし、戦前に発行された『尾道市史』によれば、演劇だけでは経営が難しくなり、やがて、活動写真館(映画館)へと転換されました。1938(昭和13)年の3度目の火災を機に、再建は叶わず、現在は「偕楽座」の裏庭にあったとされる芝守稲荷だけが残されています。

戦後、その跡地には「尾道セントラル劇場」という洋画専門の映画館がオープンしました。定員は750人、座席数は400席で、この劇場では、邦画作品では満足できない知識人の期待に応える洋画作品を上映し、他館に先がけてワイドスクリーン方式「シネ・スコープ・スクリーン」を導入するなど、時代を先取りする設備でも注目を集めました。

その後、「尾道セントラル劇場」は、尾道商工会議所会頭・金尾馨氏(当時)によって買収され、1958(昭和33)年1月21日に閉館、以降は尾道市公会堂ができるまで市民の憩いの場として提供するとして、「尾道会館」と名前を改めて再出発しました。再開後初の催しとして大衆演劇一座の公演が行われ、続く4月には山陽日日新聞社主催のお笑い演芸大会が開催され、定員1800人に対して約5000人もの観客が詰めかける盛況ぶりを見せました。

1965(昭和40)年以降は「尾道文化会館」と名前を変え、劇場からボウリングセンターへと用途を変えながら存続しましたが、最終的には市によって買い取られ、共同福祉施設となったことで、娯楽施設としての役目を終えることとなりました。

一方、新開周辺には、新開の北側に隣接する勸商場に、1899(明治32)年頃から1901(明治34)年頃まで、3階建ての寄席「玉浦座」が存在していました。

さらに、大正時代から昭和にかけては、当時の娯楽の王様といわれた劇場や活動写真館が集まり、1955(昭和30)年に迎えた最盛期には、大阪市の千日前にあやかって「千日前」と命名されました。その場所は、水尾通りから東に折れた通りで、現在、米徳や鳥徳などの飲食店が軒を連ねている限界です。この通りには、^{たまえい}玉栄館(後の尾道東映)、^{しょうえい}松栄劇場(後の尾道東

宝)、大映スバル座、^{こうえい}興栄座(尾道日活)と、4館もの映画館が立ち並び、一大レジャースポットとして賑わい、これらの映画館を所有していた備南興業社長・盛久慎蔵氏(当時)が、千日前を「市民のパラダイスにする」と語っています。

やがて昭和も後期にさしかかり、「千日前」の入場者数減少が地元新聞に報じられ、楽天地としての斜陽化が進みました。「千日前」は、最も歴史のある映画館であった「尾道東映」(玉栄館の後身で、大正時代には「世界館」という活動写真館、さらにその前は「岩井座」という寄席)を最後に、「千日前」はその幕を閉じました。



偕楽座の写真絵葉書(尾道学研究会蔵)

尾道マッチ今昔物語より 尾道楽天地限界のアノ店コノ店

マッチが企業や個人商店などの、実用性を兼ね備えた小さな広告媒体として、広く使われるようになったのは、明治時代以降のことです。そのようなマッチは「広告マッチ」と呼ばれました。

尾道でも、さまざまな広告マッチが作られてきました。多くは飲食店のもので、なかでも喫茶店やクラブ、バーなど夜のお店が大半を占めています。江戸時代から遊廓や芝居小屋でにぎわった久保新開・新地周辺に店舗を構えるものが多く、尾道の伝統的な花街文化が、姿を変えながら今なお息づいていることがうかがえます。

近ごろでは、広告マッチを置くお店もすっかり少なくなってしまった印象がありますが、ラベルを手にとって眺めてみれば、当時の新開や新地の風景や、そこで過ごした楽しいひとときがふとよみがえってくる…そんな方もいらっしゃるのではないのでしょうか。まるで、ひとときの時間旅行をしているかのような気分にさせてくれます。



楽天地限界のお店(ナイト・スポット)の広告マッチ(個人蔵)

